

3 いとしのショパン —民子が愛した音楽家たち

音楽好きの民子は、特にショパンの曲を好みました。同じ曲を複数のピアニストによる演奏で楽しむこともあったようです。

「ひきぞめはショパンと決めてマズルカの スタッカートを口吟さみ見つ」(No.16)

という歌からも、ピアノを弾くときもショパンの曲を好んで選んでいたことがわかります。また、佐代子は民子が学生時代に、常にショパンの肖像写真を持ち歩いていたと言っています。

晩年の民子は、歌をつくる作業中は必ず音楽をかけていました。

「全開の音量といふも知らぬまま 雨の夜更けに聴くモーツァルト」(No.17)

暗い気分になった時はモーツァルトを聴いたりして、音楽は人の心を慰めてくれると語っています。他にも民子は、シューマン、シューベルト、ドビュッシーなどの曲を歌に詠み込んでいます。



雑誌「ながみ通信」1985年7月号のため書かれた、自筆原稿「ノクターン9の2」(No.19) ※ノクターンとは夜想曲のこと

参考文献

- 『自解100歌選 大西民子集』大西民子/著 牧羊社 1986年
- 『大西民子の歌(現代歌人の世界4)』沢口芙美/著 雁書館 1992年
- 『青みさす雪のあけぼの-大西民子の歌と人生-』原山喜文/編 さきたま出版会 1995年
- 『回想の大西民子』北沢郁子/著 砂子屋書房 1997年
- 『評伝大西民子』有本俱子/著 短歌新聞社 2000年
- 『まぼろしは見えなかった-大西民子随筆集-』さいたま市立大宮図書館/編 さいたま市教育委員会 2007年

2021年11月11日
さいたま市立大宮図書館
さいたま市大宮区吉敷町1-124-1
電話 048-643-3701



あこがれはピアニスト

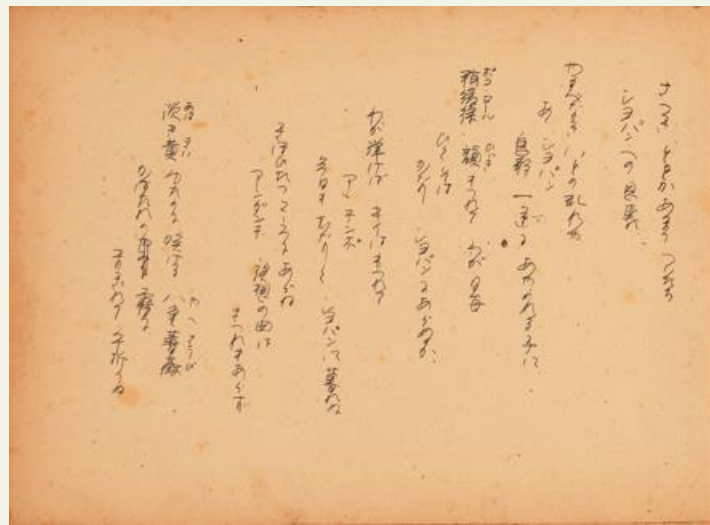
—民子と音楽—

2021年11月11日(木)~2022年1月4日(火)

No	種別	内容	所蔵者
1	自筆原稿	「ピアノ弾きて一生を清く送らむと少女のわれを占めておし夢」	
2	自筆原稿	「ピアニスタらむとしたる日も遠く今荒れし手を見つつ歎かふ」	
3	雑誌	「短歌現代」昭和62年9月号 短歌新聞社 掲載文“短歌、そして自分史 最期の言葉”	
4	雑誌(写真)	「ショパン=Chopin magazine」1987年7月号 株式会社ハンナ 掲載文“大西民子—私とピアノ”	国立国会図書館
5	手作り歌集	大西民子手作り歌集『春愁の曲 歌の集』奈良女子高等師範学校時代 掲載歌「わがびあのは拙なくあれど世に堪ふるいのち一途の悲願に似たり」	
6	自筆原稿	「弾き手と聴き手」	
7	レコード	「ショパン・ワルツ集」 ピアノ:アルフレッド・コルトー 東芝 EMI 株式会社	
8	レコード	「ポリニー、ショパン練習曲集作品10 作品25」 ピアノ:マウリツィオ・ポリニー グラモフォンレコード 1975年	
9	自筆原稿	「傘二つひろげて待てば妹はピアノに鍵をかけて出で来ぬ」	
10	書籍	『無数の耳』1966年7月刊行・初版 短歌研究社 掲載歌「妹に弾かせむワルツを選びをりわかち得る幸なほある如く」	
11	書籍	『風水』1986年8月刊行・初版 沖積舎 掲載歌「ひさびさにピアノ弾かむに今朝のみし葉の匂ひ指に残れる」	
12	書籍	『ピアノ名曲の話』門馬直衛著 新興音楽出版社 1941年	
13	自筆原稿	「二人だけの言葉をピアノと交はずやうに調律師はをり二時間ほどを」	
14	ピアノ	民子が所有していたアップライトピアノ YAMAHA 製	
15	雑誌	「短歌」昭和47年4月号 角川書店 掲載文“わが家のシレーヌ”	
16	自筆原稿	「ひきぞめはショパンと決めてマズルカの スタッカートを口吟さみ見つ」	
17	書籍	『印度の果実』1986年6月刊行・初版 短歌研究社 掲載歌「全開の音量といふも知らぬまま雨の夜更けに聴くモーツァルト」	
18	自筆原稿	「煽られし楽譜を拾ふ時の間にドビュッシーもわれは逃がしてしまふ」	
19	自筆原稿	「ノクターン9の2」	
20	レコード	「中村絃子/リスト名曲集 ためいき」ピアノ:中村絃子 株式会社 CBS ソニー	

右の所蔵者欄に記載がないものは、大宮図書館所蔵です

1 少女の夢はピアニスト



手作り歌集『春愁の曲 歌の集』 奈良女子高等師範学校時代
「シヨパンへの思慕」と題して歌が詠まれた

ピアニストになりたいという夢を持っていた民子ですが、この演奏会で自分の未熟さを感じ、自分以上に上手にピアノを弾く上級生の姿を見て、プロを目指すことにこだわらなくなったようです。その後、民子が釜石高等女学校で国語教員として働いていた時も、ピアノが弾けることを重宝がられ、担当の代わりに生徒に音楽を教えることもありました。

民子は、ピアニストへの夢を持って過ごした青春時代を振り返って、

「ピアノ弾きて一生を清く送らむと
少女のわれを占めてみし夢」(No.1)
と詠んでいます。

大西民子は、奈良女子高等師範学校時代、短歌を詠む傍らピアノをよく弾いていました。2年生の学校音楽祭で、ショパンの「ノクターン9の2」を演奏した民子は、本番直前に聴いたプロの演奏で自信を無くした際、担当の教員に激励されたことを後のエッセイに書いています(No.6)。



写真「奈良女子高等師範学校時代の民子」

2 ピアノを弾く、歌に詠む

民子は、昭和30年代前半、岩槻市(現・岩槻区)の浄国寺に母・カネ、妹・佐代子と暮らしていました。その後母が亡くなると、寂しさを紛らわすためか、佐代子はピアノを購入します。かつてピアニストを目指していた民子は、妹にピアノを教えることになり、その時の情景を

「妹に弾かせむワルツを選びをり
わがち得る幸なほある如く」(No.10)
と詠んでいます。



写真「姉妹」左から佐代子、民子



第九歌集『風の曼陀羅』の構成のため、書かれた自筆原稿 (No.13)

「二人だけの言葉をピアノと交はすように 調律師はをり二時間ほどを」(No.13)

民子が人前でピアノを弾くことは減多になかったようですが、ひとりの時や妹の前ではよく弾いていたそうです。佐代子は、民子のピアノはショパンの曲が多く、激しさはあるが静かではないと後に語っています。佐代子が40歳で亡くなると、しばらくはピアノから遠ざかりますが、再び妹のピアノを愛用するようになります。

晩年は、指の運動のためにも再びピアノを弾くことを楽しんでおり、定期的に調律も頼んでいたようです。ある日の調律を上記のように詠んでいます。



民子が所有していたアップライトピアノ YAMAHA 製 (No.14)